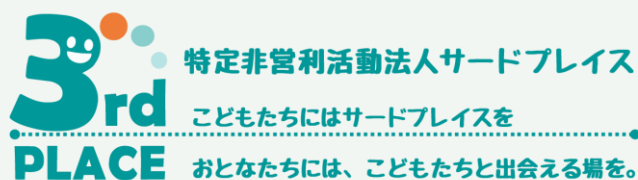


# 児童家庭支援センターと連携した ミドルリスク層への 地域生活支援の基盤づくり

## 報告書

2024年4月～2025年3月  
特定非営利活動法人サードプレイス



独立行政法人福祉医療機構  
社会福祉振興助成事業

# 鶴見区にお住まいのひとり親世帯支援事業沿革

2020年

コロナ禍により生活に影響を受けているひとり親世帯からの相談を受け、ひとり親世帯向け食料品配達を開始。  
※赤い羽根共同募金 新型コロナ感染下の福祉活動応援全国キャンペーン  
フードバンク活動応援を活用

食料品配達 9回実施 延べ54世帯利用



2021年

食料品配達 9回実施 延べ60世帯利用  
フードパントリー 7回実施 延べ28世帯利用



2022年

〈はまぎん〉ミライを創るアクションプログラムに採択  
「児童家庭支援センターと連携した地域生活支援のアウトリーチ基盤づくり」を  
テーマにひとり親食料品の配達事業を実践  
配達時に生活での困り事、子育ての相談ができるように。児童家庭支援センター  
への繋ぎもおこなう。

食料品配達 6回実施 延べ43世帯利用



2023年

毎月の定期開催をスタート

食料品配達 12回実施 延べ93世帯利用

2024年

WAM助成（社会福祉振興助成事業）に採択  
ひとり親世帯向け相談体制の拡充／ひとり親世帯の不登校の子の日中の居場所  
配達・相談・居場所をつなぎ、ひとり親に寄り添える支援。

取り組み	計画	実施
食料品配達	月2回実施	月1回定期実施 随時、相談があったタイミングで食料品を提供 食料品配達 12回実施 実数23世帯から申し込み 延べ148世帯（子ども244人計392人）利用 随時対応 8件
相談体制の拡充	児童家庭支援センター と連携	配達に相談員や心理担当職員が同行 別途来所相談/訪問相談を実施
不登校の子の 居場所	週1回 定期開催	不定期実施 週1回だと利用しにくい/通勤経路外のため子どもを連 れて行けない/子どもだけで行けない などの意見が多 く、定期利用・定期開催に至れなかった。

## 協力機関

- ・フードバンクかながわ：食料品提供
- ・区内自治会町内会：フードドライブを実施
- ・WEショップつるみ：フードドライブを実施



### ◆「連携」ではなく「連動」にこだわる

多くの生活者は、区役所や児童相談所、児童家庭支援センターには縁がない。「相談」をしなければならない状況に追い込まれてしまう人の割合の方が少ない。ハードルが高い。

生活の中の身近な施設や窓口で、もっと気軽に「世間話をするように」相談ができる場所が増えることが望ましい。

子どもたちや生活者の最も身近なところでは、居場所などの取り組みがある。しかし、近年増えている「こども食堂」などは、今はイベント的な開催がほとんどのため、毎日の生活の中に浸透しているとは考えにくい。

横浜市では、身近な施設として「地区センター」「ケアプラザ」「子育て支援拠点」がある。出産後、乳幼児期の多くは子育て支援拠点の利用が多い。親と子の集いの広場などもある。そこでスタッフが出会う「気になる世帯」の情報を、ケアプラザや児童家庭支援センターと共有をしていくことができると、包括的に世帯の見守り体制を築くことができると考える。しかし、多種多様な法人が各施設を運営していることで、理念の異なりや個人情報保護の課題などもあり、「連携」を意識することはできても、「連動」をすることができていない。

### ◆困りごとの窓口は

生活の近くでの困りごとの窓口や繋ぎは、これまでは地域の民生委員などが担ってきた。しかし、地域人材の不足などにより、定数に満たない地域も増えてきている。高齢者支援への対応で手いっぱいであったり、災害時の要援助者対策などの防災に多くの役割を担っている。より属人的なスペシャリストスキルに頼ってきた場面も多く、ひとり親をはじめとした子ども子育ての相談を地域のインフォーマル資源で対応していくことは、なかなか困難である。

### ◆「相談」というアクションの難しさ

「相談をする。」という行動の解像度を上げると、とても難易度が高いことがわかる。

・自分の困りごとを自覚している・相談しようと行動力がある・相談する先を知っている。探す力がある。・「助けて」と言える・自分の困りごとを言語化し、話す内容を整理できる。・相談した相手と関係をつくるコミュニケーション能力がある。などなど、獲得しているスキルが多く、能力の高さが求められる。

### ◆受け身での限界

「相談」として児童家庭支援センターに連絡がある場合は、すでに課題が複雑化重篤化してからというケースが多い。また、行政からの依頼での相談支援対応については、すでに虐待などの事案が起きてから、そして行政とのコミュニケーションが取れている世帯としか繋がれていないという現状がある。何か起きてからしか繋がれない。「待つ福祉」の限界がそこにはある。何か事が起きないよう緩やかにつながり、安心安全を普段の生活の中で感じてもらえる。これが、日常生活の福祉の目指すところであり、地域生活支援の基盤であると考えられる。

### ◆「待つ福祉」から「向かう福祉」への転換

「待つ福祉」から「向かう福祉」として、食料品の配達を一つの手段として実践してきた。いきなり「相談」という受け方ではなく、別のアプローチを作ることで困り感を抱えてい

ながら相談支援機関に繋がらなかった世帯やケースなどの掘り起こしをした。これまでも食料品の配達事業としては、大きく「支援」という形を打ち出さず、配達時の会話の中から困り感や相談の必要性を感じたタイミングで、児童家庭支援センターに繋いでいく方法をとった。あまり『支援感』を感じすぎないような演出は必要である。

### ◆地域生活支援、相談支援に活用ができるという提案

食料品支援を活用することは、拒否的な世帯支援に入るきっかけ、家庭訪問の口実に使うことができる。行政や児童相談所、学校、SSW（スクールソーシャルワーカー）から連絡をいただき、食料品配達から支援を継続させることができたケースが実績として複数出てきている。

児童家庭支援センターの事業と連動して取り組める場合は、アウトリーチやアーリーヘルプの一つの手段として、食料品支援を取り入れる事はとても効果的である。

### ◆相手の立場でもっと考える

私たち支援者が相談の面接をする、家庭訪問をするという事は、相談者にとって実はハードルが高いことである。当たり前ではなく、相談者が私たち支援者を受け入れる口実を作る演出を食料品を介することでできる。

### ◆副次的な効果

地域に設置されている専門機関として、社会的資源であるフードバンクとの協力体制を作ることができる。フードドライブ等により地元自治会町内会や社会福祉協議会との連携の機会を作ることができる。

この取り組みを続けてきて実感していることは、食料品という手段に限らず、支援者が地域生活支援の領域で相談者に会うことにもう少しフォーカスし、出会い方、繋がり方、寄り添い方をデザインし直すことができると、日常生活レベルでの支援の形が変わるのではないかと感じている。

### ◆番外編

どうしても支援者は「どう支援しようか」「何ができるか」といった手段が先に立ち、「相手が何を望んでいるか」「どうありたいのか」という目的を深掘りすることが不足してしまうことがある。また、相手との関係性ができていない段階（相手から「相談したい」と能動的になっていない状態）で、私が支援しますと支援臭を纏い、相手に近づきすぎてしまう。

緊急性やリスクマネジメントも大切だが、相手との関係の築き方に支援者は今一度立ち止まり、考え直す必要がある。

### ◆食料品支援は支援者にとって諸刃の剣（ものはつるぎ）

食料品は媒介の手段のほすが、食べるものがないと言う訴えだけを聞き、あまりアセスメントをすることなく食料品を無条件に提供するようになってしまう危険性がある。

「なぜ食料品が足りないのか」「食料品を提供する以外に対応策はないのか」という生活課題の解決、介入の機会を後回しにして食料品を提供することが目的になってしまう。食料品を受け取る側も、「食べるものがない」と言えば、食料品がもらえるようになり、依存的傾向が強まり、自立の機会を失っていく危険性がある。相談支援としての繋がりが信頼関係を目指していたはずが、結果的に『ご飯をくれる人たち』という認識になり、生活基盤の改善や生活に寄り添いながら自立を共に目指す関係が構築できなくなってしまう。

### ミドルリスク層の定義

生活の中にはあらゆる課題や偏りがあり、それぞれがリスクとして存在している。本事業では、いわゆる「ひとり親」に視点を置き、家庭生活のあらゆることを一人の親で担うことにより、仕事による疲弊、家事の時間の確保、子どもと関わる時間の減少など、小さな問題の積み重ねによって、日常生活が回らなくなる、虐待のリスクが高まる、精神的に追い詰められていく、社会から孤立していくなどのリスクを一般世帯よりも抱えていると考え、ひとり親世帯をミドルリスク層と整理し、地域生活を円滑におこなっていくための寄り添える支援を検討した。

ミドルリスク層でもかなりグラデーションがある。ひとり親でも、正規社員としてフルタイムで働き、十分な収入を確保できている。近隣に知り合いや親族がいて頼れる人がいる。層の中でもより養育的な支援、サポートが必要な層、経済的に困窮している層に合わせて事業の設計をおこなっている。



# ヒアリング

食料品配達をご利用いただき、ご協力いただける方にヒアリングを実施しました。

## ◆利用開始当時の状況

- ・コロナもあり、生活に対して不安感が大きかった。
- ・離婚調停中だったため、ひとり親への制度が使えず大変だった。
- ・仕事を辞めることになり、生活ができるか不安だった。

## ◆知ったキッカケ

- ・友人からの紹介
- ・職場で教えてもらった

## ◆入っててよかった食品

- ・お米  
⇒ヒアリングにご協力いただいた方が全員挙げていた。  
特に最近は、値段が上がってしまっていて買うことができない。
- ・お菓子  
⇒子どもたちがとても喜ぶ。  
ダンボールを開けるのを楽しみにしている。
- ・日用品  
⇒食品ではないけど、日常的に使うもので保管ができるので。
- ・フルーツ  
⇒価格が高いため、買うのが後回しになってしまう。
- ・レトルト食品  
⇒賞味期限が近いタイミングで届くが、時間がないときに食べやすい。
- ・乾麺  
⇒保存がきく。  
調理がしやすい。

## ◆入ってて困った食材

- ・外国の調味料や食材  
⇒使い方を調べるも、使い方がわからない。
- ・災害備蓄品  
⇒子どもたちは食べてくれない。  
美味しくない。
- ・カレールー  
⇒具材が買えない。

## ◆配達というスタイルについて

- ・届けてくれることはありがたい  
⇒子どもを連れて取りに行けない  
ありがたいけど、大変なのではないかと感じてしまう（申し訳ない気持ちになることがある）。
- ・配達でよかったこと  
⇒話ができる人が月1回来てくれることが安心感になっている。  
大丈夫だよと声をかけてくれることが嬉しい。  
これがなかったらどうなっていたのか、不安しかない。  
孤独感が薄れている。  
子どもたちの成長も見てもらえる。  
手渡しなので、自分の生活環境も見てもらえる。  
心たつの安心が届く（知っている人が来てくれる・食料品が届く）。  
配達の時に聞けるちょっとした情報がとてもありがたい。
- ・配送の方が気が楽  
⇒贅沢は言えないと思っている。  
配達時間に合わせるのが難しいときもあるけど、届けてもらっているから無理は言えない。
- ・その他  
⇒配達の時に相談したいこともあるが、配達が忙しそうで時間を気にして話せない。  
もう少し配達時にゆっくり話せると嬉しい。

### ◆最近の困り事

- ・物価高騰。
- ・子どもが高校に進学するため、毎日のお弁当のお米が用意できるか。
- ・長くこの取り組みを利用し続けていいのか気になっている。

### ◆相談先について

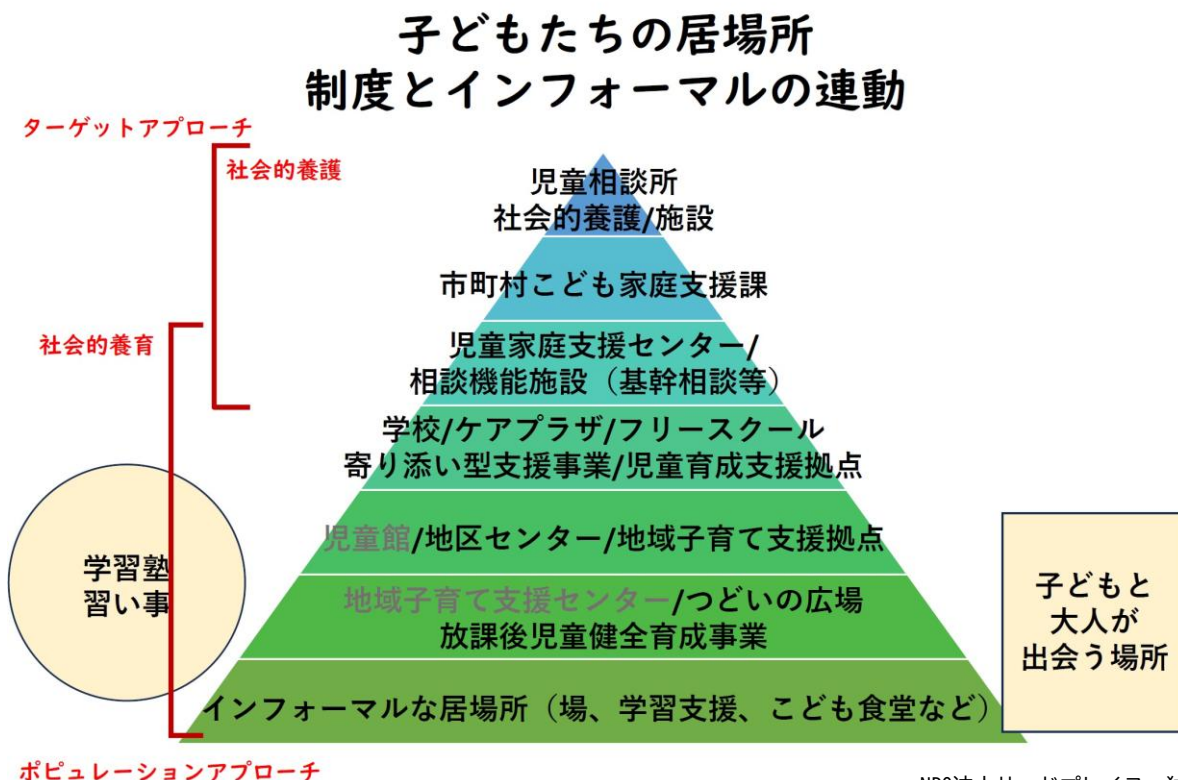
- ・相談先の情報がなかった。
- ・横浜市はひとり親については就労の相談先ばかり。生活や子どもの進学についての相談先がわからない。
- ・児童家庭支援センターを紹介してもらえてよかった。
- ・ひとり親サポートよこはまという所があることを知らなかった。

## アウトプット（その他のWAM事業の実施状況）

- ◆ひとり親世帯の不登校の子の日中の居場所  
月・火曜日に実施 28回開催 参加者延べ22人 スタッフ46人
- ◆中高生の夜の居場所  
木曜日に実施 47回開催 参加者延べ311人 スタッフ232人
- ◆啓発イベントおよび報告会  
「社会的養育総合支援センター 一陽」視察報告会  
主催研修「重層的支援体制整備事業を学ぶ」



## 多層的な地域の相談体制の連動を整理



NPO法人サードプレイス 独自整理

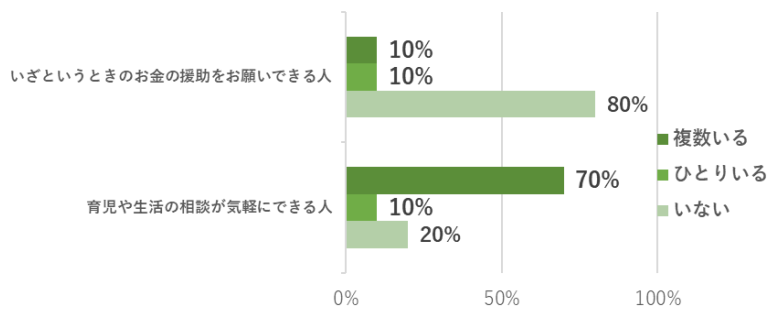
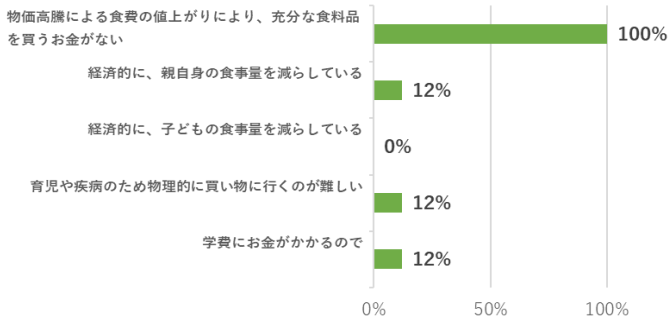
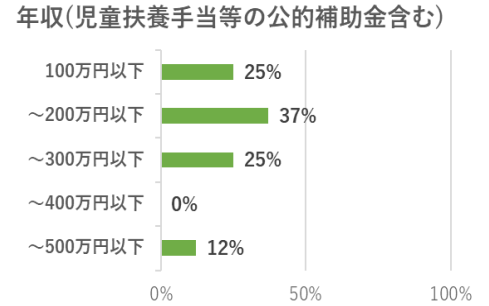
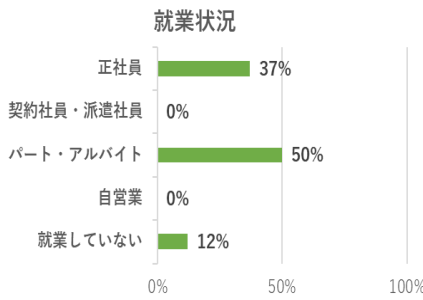
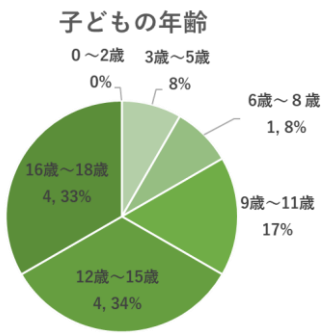
法人として居場所づくりや、学習支援、児童家庭支援センターの運営をしても、子どもたちとの出会いや支援を必要とする世帯との出会いには限界を感じている。

なかなか出会えないという課題＝「待ちの福祉」になっている。

インフォーマルな居場所が増えている中で、子どもたちや世帯と出会える場所は、より生活に近い場所となる。行政が設置する市民利用施設などの地域資源と相談機能を持つ施設とが意識を共有し、生活の近くで出会い・繋がる困りごとに対して、しっかりと相談に繋がっていく仕組み（連動）が必要である。その中で、虐待などのリスクを察知した場合には、より早く支援に入る（アーリーヘルプ）ことができるようにしていく。

# アンケート（食料品利用者が中心）

## ○申込回答者世帯状況



## 自由記述欄

### ◆保護者が生活や子育てで、困っていることや不安

- ・児童手当や医療費の支援が終了した後の学費、生活費の負担が大きくなりそうな点が不安です。
- ・私が高齢であるため経済面、健康面が常に不安です。
- ・子どもの病気への対応で何かあったとき、頼っていい所がなくてわからない。
- ・沢山ありすぎて書ききれません。

### ◆食料品支援を利用する前後での家庭の変化

- ・毎月お米をいただいているおかげで、毎食お腹いっぱいごはんを食べさせてあげられている。
- ・お米の心配をする回数が若干減りました。カップラーメンなども普段購入しないので、食事を作れない時にとても助かっております。
- ・買ったことの無い食材を食べさせてあげることが出来て良かった。
- ・毎月、お米や他の食材等をお届け頂いているおかげで、食費の節約が出来て大変有り難く感謝しております。教材等他に必要な物を購入することが出来ました。
- ・支援があることで少し生活に余裕がある感じです。
- ・毎月、誰かが訪問してくれて声をかけてもらえる、誰かが気にしてくれる安心。後は、お米を届けてもらえるので、ほかの食材を購入できる。
- ・毎回届くお米には助かります。インスタント食品も自分が体調悪い時には助かります。
- ・お米が高騰してるのでとても助かります。子ども達もお菓子など楽しみにしていますが、案内を知るのが締切りの1日前だったりして申し込めない時もある残念です。

### ◆食料品支援を利用する前後で心身に変化があったか

- ・食費を節約しなくてはならない場面で、食べるものがあるという安心感。
- ・お菓子や飲み物などの嗜好品を子ども達に出せるありがたさ。自分で購入した事がない食材を調理する楽しみが増えました。ご支援いただいていることに感謝しております。
- ・提供して下さる皆様、お届けくださる皆様のおかげで、助けて下さる方がいらっしゃるという安心感が心の支えになっております。
- ・ほんの少し余裕みたいな感じがするから。
- ・ちょっとした悩みをその時に話せるので安心します。
- ・食費が少し安くなり、その分気持ちに余裕ができた。

## 「社会的養育総合支援センター 一陽」視察



児童養護施設と児童家庭支援センター、里親支援機関、子育て支援センターを連動させながら、社会的養育総合支援センターとして地域のことも家庭支援、子育て支援を担っている一陽。要保護児童や様々な困りごとを抱えている子どもたちが増え続けている中、『連携』から『連動』に発展させるためにはという視点で、各種事業の「連動」の状況や各種施設の運営について、今回の視察で重点的に学ぶことができました。

一つの解としてご助言いただいた「コンソーシアム」。重層的支援体制整備や多機関連携を活用し、子どもや子育てに関連する機関を巻き込みながら、生活する地域に複層的な相談体制を再構築することは可能だと確認ができました。



視察の報告会を2024年12月23日（月）20:00～21:00  
オンラインにて実施。参加者10名

WAM助成で取り組んでいる内容に興味をお持ちいただき、ひとり親支援や複層的な支援の展開などについて、ご意見をいただきました。



## 主催研修「重層的支援体制整備事業を学ぶ」

2025年2月7日（金）19:00～20:30

重層的支援体制整備事業について学ぶ研修会を実施しました。

講師：矢澤 秀樹 氏

（社福）伊那市社会福祉協議会 前 地域福祉課 課長  
前 響働コーディネーター（重層支援体制コーディネーター）

会場12名、オンライン17名、合計29名が参加。

社会福祉法の改正により、令和3年度（2021年度）から重層的支援体制整備事業が創設されました。横浜市では、様々な理由により重層的支援体制整備事業が活用できていません。従来の縦割り行政の仕組みでは、支援が行き届かず地域社会に埋もれてしまう人たちがいます。子育ての相談はあっち、高齢者についての相談はそっち、一つの家庭の相談なのにあちこちに行かされたり、そこは私たちの担当ではないと線を引く担当者たち。これまでの福祉政策が整備してきた、子ども・障がい者・高齢者・生活困窮者といった対象者ごとの支援体制だけでは、人々が持つ様々なニーズへの対応が困難になっています。

講師からは、制度の説明だけでなく、事業活用に至った経緯や実際の運用の様子をお話いただきました。

諸課題やグッドプラクティスなどを交えながら、「自分のところの市町村で重層的支援体制整備事業が始まったら、どのように取り組みに関わるか」を意識できるようにしました。

質疑応答も多く、非常に関心の高さがうかがえる研修会でした。





毎月500円～の継続寄付／

# サードプレイス応援団 マンスリーサポーター募集

毎月500円からのサードプレイスの活動を継続してご支援いただく「サードプレイス応援団」のメンバー(継続ご寄付者)を募集しています。

ひとりぼっちの子がいない鶴見区にしたい！  
あなたの力を貸してください



サードプレイス応援団  
ご登録ページ

サードプレイスでは、年間で約1,000人\*の鶴見区の子どもたちと出会い、子どもたちや親を支えるさまざまな取り組みをおこなっています。

- どんな背景の子でも集まれる「こどもたちの居場所の運営」
- 学習環境に恵まれない「中高生の学習支援」
- 育つ家庭で体験の格差が生まれやすい「社会体験や地域参加の支援」
- ひとりでがんばる親たちを支える「鶴見区ひとり親支援」

この取り組みを継続的・安定的に実施していくため、サードプレイス応援団になって活動を支えてください。

\*サードプレイスが実施する取り組みに参加する子どもの延べ人数



つるちゃんのスタンプ その1  
<https://line.me/S/sticker/3435226>



つるちゃんのスタンプ その2  
<https://line.me/S/sticker/3493571>



つるちゃん寄付金つき **LINEスタンプ販売中!**



特定非営利活動法人サードプレイス

こどもたちにはサードプレイスを

おとなたちには、こどもたちと出会える場を。



ホームページ

<https://www.n-thirdplace.com/>



Facebook

<https://www.facebook.com/thirdplacetsurumi>



Instagram

<https://www.instagram.com/thirdplacetsurumi>

特定非営利活動法人サードプレイス  
〒230-0051 横浜市鶴見区鶴見中央4-7-15-201  
TEL 080 -9535-1594  
Email [thirdplace.tsurumi@gmail.com](mailto:thirdplace.tsurumi@gmail.com)